Nihon Ongaku Shudan (Pro Musica Nipponia)

日本音楽集団

第121回定期演奏会

芸術文化振興基金助成事業

芸術文化振興基金

1991年11月7日㈭午後7時開演

津田ホール

主催／日本音楽集団

日本音楽集団　TEL.03-3378-4741
〒151 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302

プログラム

一．光彩陸離（初演）　秋岸寛久 作曲

［　笛　］竹井　誠　［尺　八］Ⅰ＝米澤　浩　Ⅱ＝水川 寿也
［三味線］工藤 哲子　［琵　琶］半田 淳子
［　箏　］Ⅰ＝内藤 洋子　Ⅱ＝大畠菜穂子　［十七絃］山田 明美
［打楽器］尾崎 太一・臼杵美智代
［指　揮］天沼 裕子

二．二つの舞い　玉木宏樹 作曲

［尺　八］藤崎 重康　［　箏　］宮越 圭子

三．三味線協奏曲　長沢勝俊 作曲

［三味線独奏］簑田 司郎
［　笛　］西川 浩平　［尺　八］Ⅰ＝竹井　誠　Ⅱ＝添川 浩史
［琵　琶］坂田 美子・丹野 さえ
［　箏　］Ⅰ＝内藤 洋子　Ⅱ＝佐藤 里美　［十七絃］山田 明美
［打楽器］黒坂　昇・臼杵美智代
［指　揮］天沼 裕子

―――― 休　憩 ――――

四．詩と和楽器による「阿波の子タヌキ譚」

富士正晴 作詩・三木　稔 作曲

［合　唱］東京荒川少年少女合唱隊
［あきんど(バリトン)］渡邊 顕磨　［語り(ソプラノ)］宮下 静江
［　笛　］西川 浩平　［　笙　］西原 貴子　［篳　篥］西原 祐二
［尺　八］Ⅰ＝米澤　浩　Ⅱ＝水川 寿也　Ⅲ＝添川 浩史
［胡　弓］城ヶ崎美保　［三味線］太田 幸子　［琵　琶］田原 順子
［　箏　］Ⅰ＝宮越 圭子　Ⅱ＝桜井 智永　Ⅲ＝大畠菜穂子　［十七絃］山田 明美
［打楽器］尾崎 太一・西川 啓光・黒坂　昇
［指　揮］天沼 裕子

天沼裕子（客演指揮）

東京芸大作曲科卒。ハノーファー国立音大大学院（オペラ・指揮）修了。指揮法をV・フェルドブリル、F・ライトナーに師事。1987～88の両年にわたり、シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン音楽祭にて、故バーンスタインのアシスタントを務める。87／88年のシーズンよりオルデンブルグ歌劇場とコレペティトゥア兼指揮者として契約。88年夏オランダの第32回国際指揮者講習会で最優秀賞受賞。89年よりオーケストラ・アンサンブル金沢の常任指揮者。昨年は統一ドイツを記念しての年末特別公演(旧東独)で第九を振って話題になった。

光彩陸離

「光彩陸離」…光りかがやき、まばゆいほど美しいこと。

曲の内容とは直接関係はありませんが、演奏メンバーそれぞれの音楽がきらきらとかがやいて綾なす様を思いえがき、このタイトルをつけました。効果音的な特殊奏法等を避け、一般的な奏法のみを用い、あえて日本音楽集団のオーソドックスな編成で書いてみました。それぞれ表情の異なる即興的な4つの章からなっています。 **(秋岸寛久)**

作曲者プロフィール——横浜生まれ。東京音楽大学作曲科卒・研究科修了。助川敏弥、浦田健次郎、三木稔の各氏に師事。

二つの舞い

和楽器、特にお琴は、西洋音楽的な転調には不向きである。だから作曲も難しい。新典音楽協会から依頼を受けたとき、私は原点に立ち帰り、旋法的な書法をこころがけた。

「二つの舞い」とは、二つの旋法の対比でもある。ドビュッシーのハープの曲にも「二つの舞曲」というのがあり、「神聖な舞曲」と「卑俗な舞曲」という。それもヒントになったし、ゾロアスター教の二神、光と闇の対比なんかもヒントになった。1987年新典音楽協会委嘱作品。 **(玉木宏樹)**

作曲者プロフィール——1943年神戸生。'65年東京芸大器楽科卒。主な作品には、シンセサイザーとオーケストラのための交響曲「雲井時鳥国(くもいのほととぎすのこく)」、ピアノの為の練習用組曲「山の手線」、ヴァイオリンとピアノの為の「三つの恋唄」(1992年1月14日、東京文化会館小ホールにて演奏予定がある)。

三味線協奏曲

この曲は1967年、日本音楽集団第6回定期演奏会において、杉浦弘和氏の三味線独奏により初演されました。その後、何人かの奏者によりたびたび演奏され、集団のレパートリーとなっております。

当時、三味線に新しい光をあてようとした私は、一章を長唄三味線、二章は駒を変え沖縄の三線(さんしん)風、三章は低音三味線で、とそれぞれに音色や奏法を変化させ曲の器楽的な面を強調してみました。この試みは、一曲のうちに勘所や奏法のちがう三種類の楽器を弾きこなす奏者にとって、大きな負担であったにちがいありません。この試みに敢然と挑戦して下さった集団のメンバーの心意気に感激したものです。それは集団が結成されてから三年目の秋でした。

今回は集団の中堅として活躍中の簑田司郎君が挑戦します。その若々しい情熱あふれる演奏により、三味線の魅力をどのようにひき出し、自分の音を主張しうるか、心より期待しております。**(長沢勝俊)**

明治以来、私たち日本人の生活は西洋文明が主流になり音楽もその例外ではありませんでした。今、日本の町から伝統音楽の響きが序々に消えていっています。もちろん、三味線や箏、笛の音などに心をひかれるという、若い世代の声もよく耳にします。しかし、それを何処で聴き、何処で勉強すればよいかということになると、今の日本の状況は残念ながら恵まれているとはいえません。

『日本の音楽を全ての人達と共有しよう』それが私達の願いです。新しい世代が、本当に日本の伝統文化を楽しみあう。そんな輪が大きく広がることを念じています。 **(簑田司郎)**

簑田司郎——1956年稀音家六市の次男として熊本に生まれる。'74年三味線を東音会の杉浦弘和に師事。'75年集団に入団。'80年東京芸術大学邦楽科卒、東音会入会。'83、'89年に集団と、'74、'86、'89年にも他団体と共に海外公演を行う。現在東音会、如葉会に所属。

阿波の子タヌキ譚

〈阿波の子タヌキ譚〉は、丁度20年前の作品です。その頃の日本は高度成長の終期で公害全盛、学園紛争が悽惨なセクト争いに向う、今から見れば救いのない暗い時代でした。現代音楽でも邦楽でも精神的公害を思わせる作品が出ていた時期です。

その頃、私は集団の全ての行動に参加し、練習時も飲む時も、いつも皆なといました。こうした二昔も前の作品が、周りと違って、たぶん今の時代のように明るいのは、この優れた演奏者たちこそ日本の

代表選手なのだ、その仲間たちが演奏するものは聞く人を喜ばせ、感動を誘う音楽でなくてはならないのだ、と信じ切っていたからでしょう。

そうした信念と気概に満ちて、他に例のないものを次々に書いてきたことに今も深く満足しています。集団を引退して私はもう7年も他の分野に熱中していますので最近のことは判りません。でも、残った人たちも若い人たちと未来を画きつつ互いに信頼し合い、新しい体験を積み重ねているに違いありません。残念ながら集団には27年たっても対抗団体が現われません。世間は集団に望むしかないのです。私もひたすら期待しています。

(三木稔)

曲について——赤デンチュという、いつも赤いデンチュ（チャンチャンコ）を着ている子タヌキがいます。年寄りの肩にのっかって肩をたたいてやるのが彼女の唯一の化かし芸。一方、小僧タヌキというのがいて、彼はくたびれた旅人たちをその目的地までかついで行ってやる、といった化かし方をします。

この2種の子タヌキによって、あたたかい人間性を、土俗の場に立って訴えるこの物語りは、同時に子供たちと和楽器を結ぶ、かっこうの啓蒙作品です。作曲者の故郷徳島に取材したこの曲では、邦楽器の現代性に賭け、新しい音を追求する、いつもの三木稔の厳しさはなくリラックスした素顔で聴き手を楽しませてくれます。おかしければ声を立てて笑ってください。

1971年に四国放送の委嘱で作曲され同年四国放送によって放送初演されました。同年の芸術祭優秀賞を受賞しています。

編成は笙、篳篥、尺八3、琵琶、三味線、胡弓、箏3、十七絃、打楽器3、バス独唱・語りと児童合唱です。

客演プロフィール

東京荒川少年少女合唱隊——〈こころでうたいあげる合唱芸術〉を志して1965年11月、荒川区に誕生。創立当初から〝合唱音楽の源泉〟として〈グレゴリオ聖歌〉をとりあげ、合唱隊の大きな支えとしている。年3回の定期演奏会には宗教音楽を追求するかたわら〝日本人としてのゆたかな心をはぐくむため〟に高田三郎、中田喜直、湯山昭、南安雄、三善晃、間宮芳生、三木稔の作品に取り組んできた。1970年、台湾、フィリピン、'75、'80、'85年にはグレゴリオ聖歌発祥の地であるフランスのソレムを訪れ、その真髄にふれてきた。今夏は～創立25周年を記念して・その4～〈第4回ヨーロッパ・グレゴリオ聖歌のみなもとをたずねて〉の研修でドン・ダニエル・ソウルニエ神父さまのご指導を頂き、ローマ法王ヨハネ・パウロII世謁見の光栄に恵まれた。年1回の合宿・演奏旅行を行い、生活を通して〝音楽すること〟を求めている。メンバーは小学1年生から高校3年生まで〝音楽したい〟という心をもっていれば誰でも入隊できる——ということを基本として週3回の練習を行い、〈より深い魂の燃焼〉を願って、今日の日を大切に歩んでいる。創立25周年という記念すべき一年を、今まで縁あってこの合唱隊にかかわったすべてのメンバーを代表して、わたくしたちが歩ませていただいている、と考えている。

渡邊顕磨——1931年、青森に生まれる。大谷大学で原始仏教学を、東大大学院と東洋大学哲学研究室でインド哲学を専攻。

清水脩氏の《音楽の思惟性》に感銘をうけ、1955年東京男声合唱団入団。1965年11月創立された東京荒川少年少女合唱隊の常任指揮者となり、1977年5月より岩手県釜石市誓久山實樹寺住職としてふるさとに帰る。1982年第6回正力松太郎賞、1983年久留島武彦賞、1989年東京都功労賞を受賞。又1991年岩手日報・文化功労賞を受賞。1988年腎不全のため入院、療養を続け1990年1月より人工透析にはいる。

現在寺院の住職として、又東京荒川少年少女合唱隊の常任指揮者として活動を続け、若い魂の持ち主たちに変わらぬ愛情を傾けている。

宮下静江——1941年東京に生まれる。山脇学園卒業後、住友商事株式会社に勤務。1964年アメリカ文化センター合唱団入団、傍ら慶応大学で哲学を学ぶ。1966年3月より東京荒川少年少女合唱隊ジュニアグループの指導に当たる。その後、副指揮者として合唱隊の全ての活動に携わり、純粋な魂の持ち主たちの無限の可能性を信じて共に歩み、現在に至る。

日本音楽集団今後の主な予定

11月8日(金)	芸術祭主催公演（文化庁）「現代邦楽の系譜」第2夜に出演（長沢勝俊作曲「子供のための組曲」）
11月16日(土)	下田市公演（三木稔作曲「巨火」他）　下田市民文化会館
1992年	
1月20日(月)	**第122回定期演奏会**——邦楽器の祭典パートIII（共催＝(社)日本作曲家協議会）企画・構成＝三木稔　司会＝山本直純　バリオホール
3月11日(木)	日本音楽集団若葉マーク・コンサート（その7）　日暮里サニーホール
4月19日(日)	日本音楽集団演奏会　やしろ国際学習塾L.O.C.ホール(兵庫県社町)
5月11日(月)	**第123回定期演奏会**——春の総合定期　芝abc会館ホール
5月21日(木)	名フィル第174回定期で「急の曲」(三木作曲)を共演、指揮＝M.アッツモン　名古屋市民会館
7月9日(木)	**第124回定期演奏会**——ファンタスティックコンサート（大江戸音楽考察）企画・構成＝簑田司郎　津田ホール

「邦楽現代」休刊のお知らせ

毎年春秋に発行していました機関誌「邦楽現代」は都合により、しばらく休刊させていただきますのでご了承下さい。

INTERNATIONAL MUSIC SERVICE
ims

アイ・エム・エス ●楽器リース●保管●移動●ステージ・スタッフ派遣

〒167 東京都杉並区上荻2—21—25
オリオンシャトー1F
PHONE. 03-3397-2292
FAX. 03-3397-7728

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和樂器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481 FAX(3792)8437

上：ミュージカル・ファンタスティックス
下：猪俣　猛トリオ

ボニージャックス

いい音楽を、ナマで聴きたいな。

モービル・ライブ・サウンズ

一流の音楽をナマで聴いてみたい。だれだってそう思います。でも、たとえそう望んでもなかなかできない人々がたくさんいます。
「モービル・ライブ・サウンズ」は、地理的条件のために日頃ナマの音楽に接する機会の少ない人々に、地元の人々の要望にそった一流の演奏家によるライブ・サウンズを無料で楽しんでいただこうというプログラムです。

演奏会場には、町や村の集会場、学校の講堂や体育館など地域の人々が集うことのできる所が選ばれます。
これは、「良き企業市民」として地域社会の文化向上に更に一層寄与したいという理念に基づいて1986年から始めたもので、これまで全国各地で好評を博しています。今後も、年6回の公演を予定しています。

みんながうれしいと、うれしい。

Mobil